
時の捕縛

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の捕縛

【Nコード】

N5325F

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

時計を持っていないことはそんなに不便だろうか？少なくとも私は不便とは思わない。今ではそこらじゅうに時計はある。だからわざわざ持ち歩かなくても不便は無い。だが私の同僚はそう思っていないようだ。

「時計を持ってないのによく仕事が出るな」

営業先から出て喫茶店で休んでいると一緒に居た職場の同僚である健太郎がそんな事を言ってきた。

健太郎が言うとおりに私は時計を持っていない。

別に今のご時世では時計なんて至る所にあるから持ち歩かなくても不便は無い。それに携帯電話にすら時計が付いているぐらいだ。少しだけ辺りを見回せば時間なんていつでも確認できる。

わざわざ自分で持つ必要性が無い。それが主な理由だが時計をつけない一番の理由は他に在る。

……嫌だからだ。なんとなく……時計を持つという事が。

そんな理由で時計を持たないのは私だけだろう。

それに現在の時計は時を知るだけでなく、ファッション性を持っている。だから男女問わずにブランド時計に興味を示すのは当たり前だ。

もちろん私が勤めている職場でも同じ事が言える。そんな中で私だけが時計に興味を示していない。

どうやら健太郎はそれが不思議なようだ。

私は健太郎の顔を見ると彼は少しだけ面白そうな顔をして私を見ている。心配半分興味半分、そんなところだろう。

「別に困りはしないだろう。そこらじゅうに時計があるんだから」

「分かってないな。だからモテないんだよ」

それは関係無いと思う。それ以前に私は結婚している。だから多くの女性から身に余る好意を寄せられても困るだけだろう。

世間一般ではそれをモテないと言うのかもしれないが、私はそれで充分だ。

「もう若くないからな、今更モテたいとは思わないさ」

私の発言に健太郎は大げさに溜息を付いた。そこまでの事では無

いと思うが。

そこで終わってくれば良かったのだが、何故か健太郎は時計会社の営業マン並みに時計を私に進めてくる。

しかたなく適当に相槌を打つ事にした。

「いいか、今の時計は社会人としてのステータスでもあるんだ」

「そうだな」

「だから良い時計を持つてる奴は出世が早い」

そんな事は無いと思う。それでも健太郎はそう思い込んでいるようで、先に出世した奴がどれだけ高い時計を持っているかを少し妬みながら話し始めた。

別に私の出世が遅いわけではない。私は先に出世した彼らがそれだけの能力を持っているものだと思ってる。やり手とは彼らの事を言うのだろう。

残念な事に私にはそれだけの力はない。だから彼らと差が付いたのだろうが、妬む事も彼ら以上に努力しようという気持ちにもならなかった。

全てにおいて平凡。そう言ってしまうえばそれでお終いかもしれないけど、私の人生はそれで良いのではないかと思ってる。

彼らのように将来では重要な地位に就く者達には大きな重荷を背負わなくてはいけない。とてもじゃないが私はそんな事はごめんだ。重要な立場に立って、テレビで取り上げてくれそうな重要な決断をする。その姿はカッコイイかもしれないが、彼らに掛かる負担は私に想像できないほど大きいだろう。

それなら私は平凡で良いと思う。激動な人生は私には似合わない。だが健太郎はそんな人生を送りたいのだろうか、今度は将来の姿を妄想して私に話してくる。

私は軽く息を吐いて再び相槌を打つ事にした。

健太郎の言っている事も分からなくは無い。ブランド時計は数十万から数百万、高い物は一千万を超えてくる。だから自分自身に箔を付けるにはうってつけだ。

私のような者はともかく、上に居る人達は時計も身だしなみの一つ。付けていて当たり前のものであるから、そのような事になっているのだろう。

私のように平凡な人生を送ろうとしている者には無縁の話だ。

飲みかけのコーヒーを口に運んだ時点で、私が話を真剣に聞いていない事に気が付いた健太郎が溜息を付く。

あれだけ真剣に語ってもらって悪いが私としても真剣になれない内容だからしかたない。

健太郎もコーヒーを口に運ぶと諦めた口調で話し始めた。

「お前って、本当にあれだよな」

あれと言われても困るのだが、なんとなく言いたい事は分る。私はそういう性分であり、変えようとしないのでからしょうがないだろう。

健太郎は溜息を付くと再び口を開いた。

「時間にルーズなのは大概にしるよな」

「そんな事は無いさ、ちゃんと約束した時間は守っているよ」

健太郎は私が時計を持ってないから勝手に決め付けているのだろうがそれは違う。

自慢ではないが私は遅刻という物をした事が無い。待つことはあっても待たせる事を誰かにさせた覚えは無い。

だから私が時間にだらしないというのは確実に間違っている。

そんな私を想像できないのか健太郎は不思議そうな顔を私を見詰めると何かを思いついたのか、その事を私に尋ねてきた。

「時計をあまり使わないって事は、もしかしてカレンダーも使わないのか？」

失礼極まりない質問だ。それでも私は軽く笑うと健太郎の質問に答える。こいつがこういう奴だというのは以前から知っているから。「そんな訳無いだろう。カレンダーなら家中に張ってあるよ、寝室からトイレまでね」

家中のカレンダーを数えたら十個までは行かないものの近い数に

はなるだろう。

そんな我が家の現状によほど驚いたのか、健太郎は質問を重ねてくる。

「なんで時計は使わないのにカレンダーはそんなに使ってるんだ？」

過剰に使っているつもりは無い、必要な分だけを使っている。ま

あ、それ以外にも理由が在る事は確かだ。

「時計とカレンダーはまったく違う物だからだよ」

「んっ、どっちも同じだろう？」

時計は一日だけを、カレンダーは一日から一年を。どちらも時を刻む物には違いない。数の単位が違うだけでやっている事は同じだ。それでも私は言ってやる。

「まったく違う物だよ。一日の終わりと一年の終わりでは大きく違うのさ」

まったくワケが分らないという顔をする健太郎。そんな健太郎を見て私は思わず笑ってしまった。

「十二時間と三六五日だと大きく異なるのさ」

「だが時を刻むという事では同じだろう？」

健太郎にしては珍しくまともな質問を返してきた。私はコーヒーを口に運ぶと言葉を続ける。

「確かにその点だけを見れば両者は同じ物だ。だが見方を少し変えればまったく違う物になるのさ」

そう、物事は面白い物で見方を少し変えればまったく別な物になる。ひねくれていると言えるかもしれないが、私はそういう見方が好きだ。

健太郎にはそういう見方が分らないのだろう、興味を示しながら私の言葉を待っている。

「時計は追うものであって、カレンダーは待つものなのさ」

「はあ？」

素っ頓狂な声を上げる健太郎に私は笑ってしまった。

「お前さあ、そういう意地悪な言い方は直した方が良いぞ」

別に意地悪をしているつもりは無いのだが、健太郎にしてみればそう感じるのだろう。私としては物事を的確に言い表しているつもりなのだがな。

健太郎はコーヒーを飲み干すと考える仕草をする。どうやら私の言葉を考えているようで、なにかを思いついた事を口に出す。

「そもそも時計を追うってなんだ？ 時間は追われるものじゃないのか？」

「その表現が間違っているのさ」

追われるとは後ろから自分を目指してくる事だ。

だから時間に追われるという事は、逃げているのは自分であって追って来るものは時間という事になる。だから時間が欲しいなら、その場で待っていれば時間の方から勝手に来てくれるという事になる。

それでは変だと思うから私は時間は追うものだと思っている。

あえてその事を健太郎に言わずに笑顔で見守っていると、健太郎は諦めた表情で溜息を付くと腕に付けている時計を見た。

「そろそろ行かないとだな」

次の取引先に訪問する時間が迫っているのだろう。健太郎は荷物を持って立ち上がるが私はすっかり冷めたコーヒーを口に運ぶ。

「お前さあ、早くしろよ」

今日は二人で回る事になっているから私を急かしてくる。そんな健太郎に私は意地悪な笑みを向けながら口を開いた。

「まだ時間はあるよ」

「あのな、もうこんな時間だぞ」

腕時計を私に付き付けてくる健太郎。そんな事をしなくても店の時計で充分過ぎるほどに時間は確認できる。

だからこそ私は健太郎に言ってる。

「なっ、時間は追うものだろ」

「それはもういいって」

大きく溜息を付いた健太郎は私を置いて店を出ようとするが、そ

の前に私が健太郎に声を掛けた。

「ワリカンだから代金は置いてってくれ」

ちゃっかりしてるな、そう言いながらテーブルの上に代金を置いた健太郎は店の出口に向かいながら私に言葉を投げつけてくる。

「時間にルーズなのも大概にしるよな」

だからルーズではない。私に言わせれば皆が時間を追い過ぎだ。

私は冷めたコーヒーを飲みながら残し少ない休み時間を満喫する。

とある会社の大きなビルの前。私がそこに着くとビルの前で健太郎が待っていた。

「やっと来たか」

あの店で健太郎と別れてからそんなに時間は経っていない。それでも健太郎は長い時間を待たされたかのように不機嫌な声で私に文句を言ってくる。

「お前さあ、遅れたらどうするつもりなんだよ」

私にしてみれば謂れ無い文句だ。だから私も言い返してやる。

「おやゝ、約束の時間に遅れたのか？」

「いや、遅れては無いけどさ」

そう、遅れてはいない。それどころか約束の時間まで少しだけ余裕がある。だから私も意地悪で言っただけだ。

そんな私に健太郎は溜息を付くと妬ましい視線と共に言葉を向けてくる。

「その余裕が時々羨ましくなるよ」

別に余裕が有り余っているワケではない。私は私の時間で生きているだけに過ぎない。

「お前は時計を持っているから時間に追われるんだ。だが私は時計を持ってない、だから」

だから私は言っただけ。

「私の時間は緩やかに流れてるんだ」

（後書き）

そんな訳で、いかがでしたでしょうか。楽しんでもらえたなら幸いです。

さてさて、なんか本文では時計という存在を全否定しているように思われますが、そんな事はないですよ。……いや、本当だって。だから本作品は時計メーカーに喧嘩を売っているわけではありません！！！ ええ、そうですとも！！！！ だからやめて、さげすむ視線。

さてさて、戯言はここまでにしておいて、そろそろ締めますね。ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。出来る事なら他作品もよろしく願います。

以上、アレルギーを持っていないのに腕時計をつけるともの凄く痒くなる葵夢幻でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5325f/>

時の捕縛

2010年10月8日15時47分発行